

月刊

いじろのとも

第八卷

十月号

大人のしつけこそ

教員の

本音を聞けば

教員に

しつけがいると

思われてくる

子のしつけ

するには親の

しつけこそ

いまや欠かせぬ

こととなりけり

心の貧乏

金の貧乏

飯の貧乏

心の貧乏

真の貧乏

人生を考え直して

みたい人は(四六)

『聖書』解説(二二二)

二五 だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。

二六 空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。

二七 あなたがたのうちだが、心配したからといって自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。二八 なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つのかよくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。

二八 しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。

二九 きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくしてくだらないわけがありません。信仰の薄い人たち。

先月号は、宝を貯えるのは、地上ではなく、天にせよ、というものでした。これを聞きますと多くの人は、そんなことをしたら、生活に困るのではないかと思われるかもしれません。それに答えるのが、この部分なのです。キリストは言われます。「二五 自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。」と。

今月号は、この出だしの部分が主題になっています。それは、私たち人間の生命維持の問題、つまり衣食住に伴う経済問題だといえます。キリストの時代のイスラエルでは、右のように、食べること飲むこと、と着ることが特に問題になったのでしよう。今月号は、この生命維持にとって必要な食の問題と衣の問題で思い煩うなど

言っているのです。それは、仏教でいえば、煩惱の問題に含まれることだと言えます。

今あげた部分以外は、すべてこの衣食の問題に思い煩ってはならないことを納得させるために、色々な比喻を用いているのです。

まず、有名な「二六 空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養っていてくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではないですか。」という部分ですが、この中の「天の父がこれを養っていてくださる」ということは、実際にはそうではないこともあると思います。自然の変化につれて適応できなくて淘汰されていく植物や動物があります。でも、それも含めて、そのままに従うことが、神の働き、愛なのです。人間には、それを自分の力で何とかしようと思いつくことに不幸があるのです。もちろん、何も努力しないで手をこまねいていけばよいと言っているわけではありません。精一杯努力しますが、でも、どうすることもできないことはあるのです。その時は、とても難しいことですが、喜んで死んでいけるといえることが大切なのです。

でも、植物や動物と違って人間の場合には、この次に

出てくる「あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。」という部分が効いてきます。

では、人間は鳥よりどこがすぐれているのでしょうか。私は、それは人間が動物から進化したときに得た、人間にしかない精神としての特徴だと思ふのです。つまり、それは、他者に配慮しようとする利他主義と呼ばれる、思いやりであり、優しさだと思っているのです。

天の父は鳥でさえ、養って下さっているのですから、まして、お互いに助け合うことができる人間は、いわずもがなのなのです。

でも、人間は他者の存在を意識して行動することができるようになった代償として、私の理論でいいますと、自己と他己が分化した、その代償として自己に執着する傾向を持つようになってしまったということです。動物にはない、自己を意識して自己の生命の存続に執着する傾向をもってしまったのです。それを仏教では、先ほど述べましたように、煩惱と呼んでいるのです。

それは、自己と他己の分離・分裂です。現代人は、キリストの時代とは比べものにならないほど、自己を肥大させています。

つまり、キリストの時代と違って、日本のような先進国では、ここに出てきますように、食べる物や着る物が

なくて、あす、何を食べようかとか、何を着ようかとかといったことはないのですから、そうした問題は克服されていて、こんなことは自分には関係がないように思われるかもしれませんが。でも、そうではないのです。

「人は金が貯まるほどお金に汚くなる」といいますように、自分の思いどおりになることが増えれば増えるほど、ますます自己をはからい、自己に執着することが多くなるのです。他己を萎縮させ、麻痺させるようになってくるのです。自己と他己の分裂が起こるのです。

昔は、多くは、貧しさのためや家庭的に劣悪な環境が原因となって犯罪が起こりました。ですから、その動機もよく了解できたのですが、いまは違ってきました。いまでは、自己への執着、他者への配慮のなさから、犯罪が起こっています。例えば、オウム真理教や宮崎勤や酒鬼薔薇聖斗の事件を見れば、現在、他者への配慮のなさがどれほど進行しているか、よくお分かりだと思えます。

いま、学校でも児童・生徒・学生が先生を尊敬しなくなってきたいます。先生の権威がなくなってきました。先生を（生徒相互もそうですが）信じなくなってきました。ということとは、先生の言うことをきかなくなってきたという事です。

昔なら、授業中は静かに先生の言うことを聞くのが当たり前でしたが、いまでは、そうではなくなってきました。それは、大学でも私語が普通で、この例外ではありません。面白くもないのになぜ聞かなければならないのか、というわけです。聞いてほしければ、もつと面白い話をしろ、ということなのでしょう。この傾向は、子どもたちの自己肥大、いや大人たちの自己肥大の現れなのです。

ですから、この聖書のことばは、一見、現在の日本では無関係のように思えるかもしれませんが、それは、逆なのです。ますます、自己への執着を強めているのですから、ますます自己を捨てる教えが必要です。でも、自分でそれに気付いている人は、現在、滅多にいません。次に、二八節に出てくる「栄華を窮めたソロモン」ですが、この人は、イスラエル三代目の王様（前九七〇―九三一年在位）です。四〇年の在位期間中の前半は、富と名誉を得ましたが、後半は乱れました。

二九節の最後に、「信仰の薄い人たち」という呼びかけが出てきますが、まさに、現代人に言っているように思われます。自分を超えて自分に影響を及ぼしているものの存在を信じ、それに従って生きていかないと、人間に真の幸福は訪れません。

自作詩短歌等選

責める・許す

厳しさの
無き優しさは
ただ単に
流されていくだけ
根無し草
間違いを
間違いと
言う
勇気もて
責めるは責めよ
許すは許せ

哲学も動機

哲学も
こころが大切
その人の
動機を知れば
その人の
哲学すべて
はつきりと見え

社会が減びる

人の
精神が混乱し
家庭が崩壊し
子供が病んで
社会が減びる

原罪と宿業

人間に
原罪があるとすれば
それは
生まれは無垢なのに
成長の過程で
垢をつけざるを
得ないということ

得て勝手

得て勝手
多くの人の
生き方が

ヨーガの成果

ヨーガして
こころに妄想
浮かぶこと
修行の成果と
思う虚しさ

こころも個室にして
鍵をかける

雨三日

人間は

勝手なものよ

雨だって

三日も降れば

飽き飽きとする

守れぬ教え

二千五百年前に

示された

釈尊の教えも

老子の教えも

ソクラテスの教えも

みんな

ますます

守れなくなつて

きている

独り善がり

独善とは

独り善がりのこと

いま

世界中で

皆が

そうなっている

菩薩行

出家せず

家に執らわれ

菩薩行

日々に悪なし

誰を救うか

勝手読み

都合のよいところ

だけ読み

都合の悪いところ

は無視する

自分の法を説く

多くの宗教家が

聖人の教えではなく

自分で

自分の法を説く

解脱もしていないのに

解脱したと言つて

恥ずかしさの感情

ルース・ベネディクトは

日本を恥の文化

西洋を罪の文化

とした

でもいま

日本でも

恥ずかしさの感情が

急速に

無くなつてきている

自作随筆選

教育荒廃を救うもの

酒鬼薔薇聖斗君の事件をきっかけに、教育談義がマスコミで盛んになされています。でも、どれを聞いても、余りにも人間への洞察を欠いているように思えてしかたありません。

先日も、そうしたテレビ番組で、ある日本の最高水準にある大学の教育学担当の教授が、次のような発言をしていて驚きました。何しろそうした人は、文部省にも、社会にも大きな影響力をもっていて、私なぞが、発言するのとわけが違うように思うからです。

さて、その発言の要旨は次のようなものでした。「こうした教育の荒廃を生み出すのは、いま、日本人が自己実現に挫折しているからである。つまり、企業をみても分かるように、彼らは集団性を脱しきれておらず、また、若者を見ても、他者のことばかりを気にかけている。いずれも自己が虚しい。学校で、子どもたちに自己を充実させ、実現させるためには、ストレスがかかるのを少なくする、つまり、もっと自由にすべきである。」と。

この発言は、まったくもって、今の日本人が陥っている問題的な精神状況を典型的に示すものです。自分では偉いと思つて発言しているのでしょうか、まさに、この発言を生み出す精神風土こそが、問われているのです。

難しい言葉で恐縮ですが、それは、いま克服すべきものとなつている、「近代的合理主義」と「個人主義」の考え方の延長線上に乗つかつていて、そこから一步も出ていない考え方なのです。

いわゆる「自己を実現」させるほど、実は、人間は傲慢になつていきます。いま、日本人がそうなつています。経済は、世界一流だといつて、経済人は、企業工ゴを丸出して、世界中を席卷しました（いまもそうです）。その傲慢の付けがきて、銀行はその後始末に国民に低利を強いて、濡れ手に泡の儲けをしています。それでも、まだ潰れそうな銀行が残っています。そして、今後も続くでしょうが、企業家は、日本の技術力を生かして良質な工業製品を世界に「高値」で輸出し、大儲けをしています。そして、うまいものを求めて、食料を、世界中から「安値」で輸入しています。そのため、日本の農業は、瀕死の状態です。もはや、経済原則では日本農業は立ち行かなくなつてきています。しかし、まだ、それに気づかず、農業復興を経済原則ではかろうと、模索

しています。馬鹿げたことです。

でも、こうした工業の繁栄は、日本人が戦後求めてきたもの以外の何者でもありません。まさに日本人のエゴの追求以外の何者でもないのです。ですから、それは、自己実現した結果と言えます。そして、自己を肥大させ、傲慢になっているのです。上にあげた教授のようにです。人間は自己が傲慢になるほど、まわりが見えなくなってきました。他者のこと、社会のことが分からなくなってくるのです。それは、自分が分からなくなることでもあります。

日本人の集団的傾向は、年配者ではまだ残っています。それは、日本人の善い所です。そのお陰で、一致協力してヨーロッパ思想を受け入れ、それに乗っかって、経済も繁栄してきました。この現実には、教授のいう「自己実現の挫折」とは無関係なことです。いや、それどころか、挫折とは逆に自己を実現させた結果、多くの人が、特に若い人たちが、自己を肥大させることとなり、集団性を今や、失ってきていると言えるのです。なお、若者が、他者のことばかりを気にかけるのは、集団性からではなく、自己に閉じた人の特徴としてそうするのです。こうした現代の状況の反映として、家庭からは、愛がなくなり、家庭が崩壊していつています。そのため子ど

もは心を病んで育ち、学校が荒れ、凶悪な犯罪を平気で犯すようになって来ているのです。また工業の繁栄で、農地は縮小・荒廃し、農業は潰れそうです。家庭と農業は生活の基本ですが、それが崩れてきているのです。

人間は、自由になればなるほど、傲慢になります。特に、統制が必要な子どもに、これ以上、学校で自由を与えてみても、子どもを傲慢にするだけです。他者への配慮ができない子どもを、ますます増やすだけなのです。

テレビである高名の臨床心理学者が、学校でのカウンセリングの必要性を説いていましたが、いまの学校の荒廃は、そんな小手先の対症療法で救えるようなものではありません。

また少年法の改正なども議論されていますが、少年法をいじつたぐらいで、今の趨勢を変えられるわけではありません。もつとずっと深刻な問題なのです。

いま、子どもたちに必要なものは、親や先生の愛です。そして、その愛に基づいたしつけです。統制です。それと同時に、学力偏重からの開放です。塾へ行かない中学生はいないのではないかと思えるほど、学力競争が加熱しています。戸外で遊ぶ子どもがいなくなりました。

愛を復活するには、家庭では、親や祖父母が大切です。学校では、先生が大切です。

家庭の役割を取り戻すには、まず、家庭に父も母も居なければなりません。子どもと話す時間がいります。家庭団欒の時間がいります。共に遊ぶ時間がいります。共に働く時間がいります。そのためには、企業工ゴの追求ばかりに目が眩んではなりません。父の企業戦士からの開放がいります。母も家庭の外で働くべきですが、父も逆に家庭に帰らなければなりません。

私は、一つの提案として、もつと多くの人が、自給のために農業をすべきだと思うのです。ここでは、子どもも、父も母も、祖父も祖母もみんな係わって働くべきです。大都市を廃止し、日本国中を田舎にすべきです。経済的繁栄ばかりをめざしていたら、人間が滅びます。強者ばかりが得をしていたら、人類が滅びます。

日本の教育を変え、子どもを救い、社会を救うには、徹底した社会の変革がいります。

農地を小分けにして、誰でもが農業をできるようにしなければなりません。労働も、残業は制限すべきです。労働時間ももつと短くすべきです。また、食料品（農林漁産品）の輸入は原則として禁止すべきです。家庭や国々だけではなく、国際間でもそれらは自給自足を原則とすべきだと思います。おそらくそうすれば、日本ではこれらの値段が上がると思いますが、そうなれば、誰でも

が農業や林業や漁業をするようになると思います。工業も家内工業でやれるように分散化すべきです。ある意味で地域化です。地域ごとに生活の単位をつくるべきです。いま、工業の分業化が進み、人間が、そして生活が、小分けになり過ぎています。また、家庭の機能も小分けされ過ぎています。そのために、現代人が、特に子どもが、心（自己と他己）を統合できなくなっているのです。

いま、教員の再教育がなされていますが、それは、全部、知識や技能の再教育です。そんなことをしても、教員を人間性が崇高な、善い教員にすることはできません。ますます、傲慢な教員を増やすだけです。愛を喪失させるだけです。子どもを理解する資質を喪失させるだけです。役割として子どもを受け入れるようにはなれるかもしれませんが、適切な新しい知識や技能を教えることができるようになるかもしれませんが、愛をもつようにはなれません。いま、必要なのは子どもを愛する教師をつくることです。私の言葉でいえば、教師の「他己」を育てることです。それには、再教育する側が、愛をもって教師を統制しなければなりません。愛することは「あたま」で分かせてもできるようなことではありません。「こころ」と「からだ」と「あたま」を使って、修行させなければだめなのです。

釈尊のうとば(六一)

法句経解説

(二一七) 徳行と見識をそなえ、法(のり)にしたがつて生き、真実を語り、自分のなすべきことを行なう人は、人々から愛される。

別に難しいことはありません。読まれた通りですが、少しだけ解説しておきます。

どんな人が、人々から愛されるかを語っているわけですが、その典型はこれまで聖人と言われてきた人々だと言えます。たとえば、老子であり、釈尊であり、ソクラテスであり、キリストです。

でも、老子は、どこでいつ生まれ、どこでいつ亡くなったかさえ定かではありません。また、ソクラテスは死刑にされましたし、キリストも同様に磔の刑に服しました。ですから、ここでいう人々に愛されるというのは、生きている時に同時代の人々から愛されるというわけではありません。こうした人たちは、死後に多くのの人たちから愛されているわけです。ここでも、もちろんそういう意味です。間違った世界に適応することは、間違ったことをすることもあるのです。

さて、それぞれのことはですが、徳行とは何でしょうか。それは、自分のしたいことが他者の期待や要請と統合されて為される行為のことです。それは、いわゆる世間では人格者と呼ばれるような行為と言えます。

次に、見識ですが、これは、何が善いことで、何が悪いことなのかについての総合的な判断のことです。ですから、徳行を為す基(もと)になります。そこには、「こころ」も「からだ」も「あたま」も全てが関連しているのです。「あたま」だけで判断するように思えるかもしれませんが、そうではありません。

次に、法(のり)にしたがつて生きる、ということですが、一言で言えば、それは「宇宙根源の原理」にしたがつて生きるということです。仏や神にしたがつて生きることです。したがうとは、自然隋順という言葉がありますように、それを信じ、身も心もまかせて生きることです。そうできるのは、「こころ(情動 感情)」の働きによります。

次に、真実を語る、とは、「あたま(認知 言語)」の働きとして行われます。

最後に、自分のなすべきことを行う、ということですが、これは、「からだ(感覚 運動)」の働きです。

それぞれの働きを高めることが、必要ですが、でも、

それだけでは不十分です。これらは意識水準での話で、真にこうできるためには、無意識を磨かなければなりません。毎日、ひたすら、精進しなければならぬのです。

(二一八) ことばで説き得ないもの(「ニルヴァーナ」)に對する志を起し、意(おもい)はみたされ、諸の愛欲に心の礙(さまた)げられることのない人は、(流れを上る者)とよばれる。

「ことばで説き得ないもの(「ニルヴァーナ」とは、解脱や悟りの境地のことですが、もっと一般的なことばで言えば、自らの絶対な幸福・安寧であり、それは同時に、他者の幸福・安寧の心からの念願であるということ)です。

こうしたものは、多くの人が望んでいると思いますが、でも現代では、それが、次に述べられている「諸々の愛欲」の満足にとつて代わられているように思うのです。

自分の欲望(性欲・食欲・優越欲)を満足させることが、自分の幸せであり、安寧であると勘違いしているのだと思うのです。そして他者の幸福・安寧はせいぜい自分の家族や同僚・勤務仲間のことしか考えていません。それが、他者の幸せを考えることだと勘違いしているのです。自分の家族や同僚は損をしても、地球全員の福祉

のためには、犠牲になるといつた考え方は、全くと言っていいほどないように思えます。

真に幸せになるには、自己(の欲望=愛欲)への執着を克服しなければなりません。「意(おもい)はみたされ、諸の愛欲に心の礙(さまた)げられることのない」状態に至らなければなりません。意がみたされるとは、自己統制、つまり自分がしたい、あるいはしてはならないと意図することが全てできているということです。

最後に「流れを上る者」とは、かなり比喩的で、様々な解釈が可能のように思えます。「流れ」を何のたとえと考えるかで、いろいろ違った解釈になるように思えます。例えば、流れを川の流れと考えますと、川を上流へ上るように世間に流されなくて、自分の州(しま)を作りながら、理想の上流へと向かって上っていくと考えられます。また、天から贈られて自分が生まれ下った流れだとしますと、自分の生き方として自分の意思でそれの上つて天上に達するのだと考えられることもできます。また、時間の流れだと思えますと、死として未来から流れてくる時間の流れを逆になら上つて行き、ついに時間、つまり死を超えた世界に達するとも考えられるのです。

自己(の欲望)への執着を克服すべく精進しましょう。

後記

一、すっかり秋らしくなってきました。もう、朝晩は寒い感じですが。こちらでは、秋祭りが終わり、稲刈りが盛んに行われています。

二、私も、サツマイモを（一部掘りで）収穫しています。大豆も、枝豆としてかなりとりました。ネギも随時とり、ぬたにして食べています。

三、九月一二日（金）に、徳島県の被差別部落出身の教員の方たちとの話し合いの会で、話題提供をさせて頂きました。内容は、現在の子どもの精神状況についてが中心になりました。その後、熱心なご討議を頂きました。夜、懇親会にも出席させて頂き、いろいろ本音で話し合うことができました。ありがとうございました。

四、予定通り、九月末大学の紀要に「時間性の学としての倫理学 自己・他己双対理論による革新」という題で論文を提出しました。四百字詰で約八十枚余りです。

五、その内容は、大谷愛人著『倫理学講義』（勁草書房刊）を読んで、同氏のいう「時間性の学」としての倫理学は、私の確立した時間論そのものであることが明らかになり、そのことを中心に書いたものです。ご関心のある方はどうぞお申しつけ下さい。原稿のコピーですが、お送りいたします。

六、先月号の随筆に書きました断食のことですが、その後、古本屋で次の本を見つけました。それは、先月号でもあげました甲田光雄氏の書かれたもので、『家庭でできる断食健康法』（創元社刊）というものでした。

七、その中に、水とお茶のみによる本断食ではなくて、「すまし汁断食」と言って、水の代わりに、昆布と乾燥椎茸でだしをとり、それに醤油と黒砂糖で味をつけて一日二回三合ずつ飲むというものです。これによって空腹感はかなり緩和できるということです。その他にもいろいろ長所があります。私も、試みましたが、言われるままの味付けでは、塩辛く感じました。

月刊 こころのとも 第八卷 十月号 (通巻 九十四号)	平成九年十月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（よ）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

